

A95 1605(慶長9)年東海・南海津波地震の地学的意義

石橋 克彦

(建設省建築研究所・国際地震工学部)

●1605(慶長9)年の西南日本太平洋岸の大地震について、石橋(1978)は、宇佐美(1975)・羽鳥(1975)・「理科年表」の南海沖・房総沖二元説に疑問を呈し、震源域は大局的には1707年宝永地震と同じだと考えた。ただし、津波地震である可能性を示唆した。一方、飯田(1981)は、東海沖と南海沖の二元地震で、宝永・安政・昭和の巨大地震系列と同じタイプであるとした(震害も)。本論では、史料を一層吟味して、本地震が宝永・安政・昭和などの系列とは非常に異なる南海トラフ沿いの巨大津波地震であることを主張する。

●本論で強調したい事実認識の主なものは、

①京都でほとんど無感だったことが史料的に確かである。これは本地震を考えるうえで最も重要な点で、他の南海沖または東海沖の巨大地震(京都で震度5に達し余震も多く感じる)と著しく異なる。

②^{増訂}「大日本地震史料」の唯一の震害記事は、淡路島の干光寺の諸堂が倒れ仏像が堂前に飛び出したというものであるが、これは、1825年に完成した郷土誌「淡路草」の雑多な叙述の一部であり、別の裏付け史料がない限り信頼度は低い。むしろ、京都でほとんど無感だった事実から、誤った伝承にすぎ

ないと鬼われる。

③飯田(1981)は、淡美半島の田原城の矢倉がこの地震でゆり崩れたとする「田原野史」の推測を採用しているが、この推測は、「1614年に」と明記している原史料を先入観で読み替えたものであり、同感できない。しかも、京都無感の事実と矛盾している。関(1976)は、掛川城が本地震で被害を被ったらしいと考えているが、これも史料裏付けのない推測である。むしろ、この当時の重要史料である「当代記」の記述や他の史料の状況からみて、東海地方に大きな震害があった可能性は低い。

●その他の従来知られている確かな事実も総合して描いた本地震の地震像は：——当日朝から夕方まで室戸半島付近で局地的大地震が連続した。これは、プレート内 *imbricate faults* の活動かと思われる。夕方になって、南海沖～東海沖のトラフ沿いで時定数の長い *main slip* が発生した。これは、スベリ面が非常に長くほぼ連続していると考えられることから、付加プリズム内の高角断層運動というよりは、低角のプレート境界メガスラスト浅部がゆっくりすべったものと鬼われる。これによって南九州から房総まで大津波を生じた。

